

## 一つの声で社会が変わる

岐阜市立境川中学校 3年  
木股 わかな(きまた わかな)

みなさんは、誰かが困っていた時どうしますか？声をかけますか？それとも通り過ぎますか？

私は障がいがある人にも、ない人にも困っていたら声をかけてほしいと思います。

私がこう思うのは、私の双子の姉がいくつかの障がいをかかえているからです。姉は、知的障がいや、足が思うように動かないという脳の障がいなどを持っています。姉と生活を共にする上で「辛そうだな」「大変そうだな」と思うことがいくつかあります。

例えば、車イスでの移動は何をするにも大変です。車イスでは通れない場所や、少しの段差でも誰かに手伝ってもらわないと乗り越えられないこともあります。その上、ショッピングモールなどでは、車イスをあまり見慣れていないからか、小さい子に見られてしまうこともあります。みんなと同じようには、できないこともできると思われてしまうこともあります。姉は口では言いませんが、嫌だと感じていることもあると思います。

でも、先日、こんな嬉しいことがありました。姉が車イスに乗っているとき、階段では行けないし、エレベーターは混んでいて「どうしよう」と悩んでいたら、エレベーターの前にいた人が「先にどうぞ!」と声をかけてくださったのです。この時の姉は、とても嬉しそうでした。このようなことから、最初は戸惑いもあると思いますが、勇気を出して声をかけてみると、自分も相手もとても嬉しい気持ちになると思います。

しかし、車イスに乗っていたり、補聴器をつけていたり、目に見えるものがあると「障がいを持っているんだな」とわかりますが、脳や心の病気、発達障害など目に見えないことには気づくのが難しいのです。だから私は誰でも困っている人がいたら声をかけることが大切だと思います。

もちろん声をかけるには勇気がいると思うし、「自分が声をかけても力にならない」とか「むしろ迷惑かもしれない」と遠慮しがちになってしまうと思います。私も「恥ずかしい」とか「逆に困らせてしまわないかな」という思いで通り過ぎたこともあります。

でも、小学生の頃、飲食店で席が空いていなくて困っている親子がいたとき、席を譲ると、「ありがとう」と、とても感謝されました。この時、「なんで今まで見て見ぬふりをしてしまったんだろう」という気持ちと「役に立ててとても嬉しい」という気持ちになりました。だから、昔のことですがとても鮮明に覚えています。

今の時代、ユニバーサルデザインや障がい者マークなど、たくさんの工夫がされています。そのおかげでとても過ごしやすくなっていると思います。ですが、それだけでは全員が安心できるとは言えないのです。

心の病気があり、仕事や学校を「休みたい」と言っても、それを甘えという人もいます。発達障害の人も人口の数パーセントはいます。なぜ「みんなと同じようにできない」と叱られたり、「こんな普通のことができないのか」と馬鹿にされたりします。でも「ふつう」とは何でしょうか。「ふつう」とはひとくくりではないと私は思います。一人一人の「ふつう」があるはずです。だから「みんなが違う」ことを当たり前と考えられる社会、一人一人のことを理解して接していく社会になってほしいのです。一人一人が、助け合ってみんなが幸せに過ごせるようになってほしいです。

私は「心の痛みはすり傷のように誰もが分かる痛みではなく、自分がその立場に立ってみないとわからない痛み」だと思います。だから、私も自分から「大丈夫ですか?」という声をかけていきたいです。